

令和6年度 第3回文化振興委員会 会議要旨

令和7年2月18日(火) 午後3時～
豊田市民文化会館 会議室 A

出席者(敬称略)

委員	原田眞二(委員長)、葵真弓(副委員長)、相田祐里、小出充訓、原小百合、半田将仁	
オブザーバー	豊田彬子(理事長)、藤本聡(専務理事)	
事務局	岡本晴貴(文化部長) 〔文化事業課〕 原田秀樹(課長)、柴田崇博(副主幹)	〔市民文化会館〕 鈴木光行(所長)、梅村陽子(副所長)

1 あいさつ

豊田理事長
原田委員長

2 前回の委員会議事録の確認

「令和6年度 第2回文化振興委員会 議事録」

3 報告事項

(1) 令和6年度後期モニタリング報告

●『第35回歳末チャリティー作品展』

委員

概ねの意見は評価書のとおり。付け加えるならば、入口部分に設置されたチョークで描かれた看板に目を引かれた。会館スタッフが描いたものと聞いた。絵の内容もチャリティーにふさわしいもので心がほっこりした。小さな試みではあるが、来場者が見てホッとするようなものが随所にあることはいいことだと感じた。

委員

作品が少なくなる第2日目に伺った。今年は会場が賑わうようにミニライブを行っておりその様子を見させてもらった。印象としては会場の奥で行うよりも入口に近いほうが多くの人目に留まり、他の目的で来場された人たちが会場に足を向けてくれるのではないかと感じた。

●『げきじょうたんけんツアー2024(冬休みSP)』

委員

「げきじょうたんけんツアー」は、夏休みも拝見させてもらった。その時と比較すると格段のレベルアップを感じた。前回の評価では様々な意見を述べさせてもらったが、随所に意見が反映されており、評価をした甲斐があったと感じた。まだまだ伸びしろがあるので、今後に大いに期待したい。

●『文化活動者派遣事業』

委員

「飛び出すカード」をモニタリングした。その際、上手にできなかった子どもが授業の最後まで泣きながら机に突っ伏してしまった場面に遭遇し、学校やクラスによってさま

さまざまな生徒がいる中で担当教員だけでなく講師及び財団職員もその場その場の対応ができるようなスキルアップが必要と感じた。しかし、現実には難しい問題だろうと同時に感じた。

委員

「文化活動者派遣事業」の名称が主催者目線で事務的すぎる。あくまで子どもが生きる力をはぐくむ事業であり、子どもたちの感性の育成、コミュニケーション能力・表現力の向上を狙っているならば、子どものための事業といったことがわかり易い名称のほうがいいのではないか。名称の変更は関わる職員の意識改革にもなる。

(例：子ども生きるカプロジェクト)

委員

俳句の授業を視察した。本来は2時間のメニューを学校の都合で短縮して実施。季節柄「秋」を題材に授業を行うことが決まっており、講師は屋外で子どもたち自らが「秋」を見つけることからやりたかったようであった。授業のメインが何かということが事前に学校に伝わってなかったことが残念であった。

●『とよた市民アートプロジェクト』

委員

「とよたまちなか芸術祭」では、来場者がこの機会をきっかけにサポーターになり、その後運営者として関わるようになる。また、公募したアーティストがその後豊田市に関係のあるアーティストとして活動するなどの進展が見られる企画でとても良かった。ただし、来場者が少なかったのが残念。誘客は改善の必要がある。

「関わりしろ」というキーワードから地域の人がもっと関わるべきではないかと感じたが、アーティストと主催者以外に地元の教師、商店街・自治会の方との関係はどうなっているのか疑問に感じたがどのように取り組んでいるのか。

事務局

⇒ 具体的なものはない。場所を通じてイベントやその趣旨を理解してもらおうと考えている。

委員

地域のプロジェクトにするならば、地域の人たちも巻き込むとより良いものになる。

委員

まちなか芸術祭の会場を駆け足で廻った。会場スタッフがスマホの操作に集中し、会場に気づいてもらえない箇所もあり残念だった。

●『とよたデカスプロジェクト』

委員

豊田のシティープロモーション&課題解決&人材育成(参加アーティストが成長する機会)が融合された良い企画。アーティストや企画立案者のみで企画提案するのではなく、「アーティスト・企画立案者」と「主催者(文化振興財団)や豊田市が連携を推進したい地域のステークホルダー(企業・団体・個人等)」との共同提案が要件に含まれるとさらに事業の価値が高まる可能性がある。ただし、応募のハードルが上がることは間違いなく、

参加者を減らさないためにはバランスが必要。主催者が求める具体的な方向性を示すことで事業の意義が上がると思われる。

(例：外国籍の人たちの社会的孤立をアートで解決する。)

「農村舞台」「まちなか芸術祭」「デカスプロジェクト」の3事業は、アピールポイントはそれぞれあるが重複する部分もあり、位置づけがわかりづらいと感じる。統合や再編をすることで効果的な予算の投入、具体的な成果の実現などが遂げられると感じたが、現状の位置づけはどうなっているのか。

委員

⇒ 「市民アートプロジェクト」は裾野を広げる事業、「デカスプロジェクト」は人を育てる事業、「農村舞台」は会場を生かす事業とすみ分けているが、最近のトレンドが「社会課題をアートで解決する」という方向に傾いていることも感じており、委員の意見は参考になった。今後、事業の再編や融合を模索したい。

●『キーウ・クラシックバレエ』『DRUM TAO』

委員

「キーウ・クラシックバレエ」「DRUM TAO」のような大きな舞台公演は（豊田では）見る機会が少ないのでもっとあってほしいと思う。大きな舞台の公演は見てるとテンションも上がり、とても良いものを感じた。キーウは財政面のリスクが少なかったと聞いている。そのようにリスクを伴わない内容ならばもっと多くてもいいと思うが今後の見通しはどうか。

事務局

⇒ 舞台公演の場合、プロモーターの公演スケジュールと会場の都合が合うことが前提。買取公演ならば何年も前から調整をかけられる。売り込みが多いのはツアーが決まった段階で空き日程を埋めるために空きの前の公演地の近隣で会場を探すやり方。名義だけの共催は会館の負担も少なく、市民に芸術鑑賞機会を提供できるという二つのメリットがある。

●全体を通して

委員

昨年「アート体験フェア」に自分の子どもを参加させた。そこに参加した子どもたちが次に参加できる（ステップアップする）事業があるといい。例えば対象が子どものものは「子ども○○シリーズ」のような事業ができるといいのではないかと。

少し意味合いは違うが「ファミリープログラム」というネーミングは、従来、小さな子どもとその保護者を想定していたが、昨今の家族の多様性を鑑みると使いにくいワードになった。

公演の参加者アンケートから参加者の求めるもの（ニーズ）を聞き出せる内容を考えている。

(2) 令和6年度事業報告について

- ・ 令和6年度市民文化会館事業報告を説明する。
- ・ 令和6年度文化事業課事業報告を説明する。

委員

「あしながプロジェクト」若年層の寄付金額を新設するなど PR を含めた工夫とは。

事務局

⇒ 寄付金額が R5 年度までは 10,000 円/人。R6 年度は 10,000 円/団体、5,000 円 /個人としたが寄付者の増加（新規の寄付者の増加）には至らなかった。PR が行き届いていない結果と考えている。1 口の金額を下げることで多くの方が賛同してくれるきっかけになるとも考えている。1 口 500 円や 1,000 円など額は小さくとも「私の善意が社会の役に立っている」と思っていただけの方を増やしたい。

委員

可児市の同様のプロジェクトでは、WEB であれば来館しなくても参加が可能のため、WEB 上で寄付を検討している。現状は、1 口 30,000 円で、寄付のほとんどが企業の CSR としての寄付となっている。個人は 5 名以下である。

委員

可児市においても国際交流協会と連携して多文化共生プロジェクトを実施した。普段劇場に来ない国際交流協会の施設に集う人たちが劇場に来るきっかけになり、結果的に客層の広がりにつながった。
チラシでの拡散する PR は効果があまり見られなかった。それよりも効果があったのは、「知り合いの知り合いは知り合い」にアプローチするような人を介した PR だった。
R6 年度の事業では多文化共生に力を入れていたようだが、R7 年度の展望はどうか。

事務局

⇒ とりあえず 6 年度と同様のラインナップになる。ただし、前年の反省を生かした内容にブラッシュアップする。PR には特に力を入れたい。

委員

文化情報誌「カレント」をいただける数が中途半端。WEB 記事と紙媒体の配布の希望を取ればいいのか。

以上、会議終了

4 その他

(1) 来期の文化振興委員会について

① 委員について

- ・ 委員 3 名の退任、2 名の再任
- ・ 新規に委員を公募する

② 委員会について

令和 7 年度 第 1 回委員会 5 月中旬頃を候補とする。